

日本一の鉄製塔婆 清巖寺の鉄塔婆

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司

宇都宮市大通りにある清巖寺の本堂右手前に二つの建物がある。南側のコンクリート製の建物、入口に立つ案内板によれば国指定重要文化財の鉄塔婆の収蔵庫とある。鉄塔婆は、もともと野ざらしであったが、その後雨除けの屋根をつけ、さらに保存・保護のために建物の内部に取り込んだ次第である。

この鉄塔婆のある清巖寺は、建保三年(一二五)、宇都宮五代城主頼綱が、宿郷に念仏堂を建てたのが起源とされる。その後天元元年(二五七三)宇都宮氏の支族芳賀(清原)の高継が、兄高照の菩提を弔うために、宿郷にあった念仏堂を現在地に移し、文禄二年(二五九三)に本堂などを造営し、芳賀氏の「芳」を採って山号を「芳宮山」、高照の「照」を採って院号を「高照山」、清原氏の「清」を採って「清巖寺」と称した。

ところがこの鉄塔婆は、もともと清巖寺にあったものではないから話



清巖寺「鉄塔婆」



清巖寺

がややこしくなる。当初は宇都宮氏の菩提寺のひとつ東勝寺にあったもので、宇都宮八代城主貞綱が七代城主の父景綱のために建立した寺という。初め田川の東にあり、後に今のパルコ付近に移った。寺領三四九石を有し七堂伽藍をなわる立派な寺であったが、慶長二年(一五九七)宇都宮二十二代城主の国綱が所領没収となり、それに伴い廃寺となった。そこで鉄塔婆は、宇都宮氏と関係深い清巖寺に移されたというわけである。

清巖寺の鉄塔婆は、高さが三・三メートル、幅三十センチ、厚さ六センチの縦長のもので、材質は塔婆としては極めて珍しい鉄である。表面は青石塔婆と同じ形式で、上部に阿弥陀を表す梵字、その下に雲に乗る阿弥陀三尊、さらにその下に四句二八字の仏徳を賛美する詩ならびに四行

七八字の銘文が浮彫りにされている。銘文によれば、正和元年(一二三二)

の八月、亡き母の十三回忌にあたり、供養のために建立されたことがわかる。建立者の名前は記されていないが、当初東勝寺にあったことや年代から貞綱ではないかと思われる。

ところで、鎌倉時代に鉄製の仏像が関東各地で作られた。現在百体前後が判明しているといい、この鉄塔婆もその鉄仏の範疇とされる。仏像の材料は、多くは木や銅、石が主流である。鉄は融点が一五三九度と銅よりも高く扱いにくい。にもかかわらず鉄仏が鎌倉時代に集中するのは、一番堅い金属であった鉄に対する信仰とともに、鉄の持つ荒い肌ざわりや素材で荒削りなところが武家の好みに合ったからといわれている。

ともあれこれだけの大きな鉄塔婆は他に見当たらない。工芸的にも素晴らしい、まさに「日本一の鉄塔婆」といえる。また、当時の鋳物製造の技術の高さや阿弥陀信仰の一端が窺え、さらには宇都宮氏の政治力・経済力を知る手がかりともなり貴重な資料である。

鉄塔婆は、所在が東勝寺から清巖寺へと移ったが、修復・保存の面でも紆余曲折をたどった。何分鉄で出来ており錆びが生じ傷みやすい。嘉永三年(一八五〇)には暴風で二箇所が折れ、明治四十四年国宝指定を機に破損箇所が修復された。その後、覆い堂が出来たが、平成九年に温湿度管理が可能な収蔵庫ができた。収蔵庫中央でんと構える鉄塔婆の姿が凛々しい。